

障がい者 – 障がいのある人との共生 –

「僕の気持ち」

僕の父親は障がい者です。左手の指で動かせるのは親指と小指だけで、あとは少しか人さし指が動くくらいなのです。父は、そのため小学校に入学してすぐに「おまえは鳥の手や」とみんなにからかわれ、そのことがすごく悲しく泣く日がいっぱいあったそうです。

また、父は野球をしたかったのですが、左手の二本の指しか動かなかったためグローブをつけることができず、中学校では卓球をしたそうです。でも、やっぱり「おまえの手は鳥の手や」とバカにされ、泣く泣く帰る日があったそうです。

僕はこのような話を聞いたことはあったのですが小学校6年生のときまで「ハハ、あいつ何しよんの？」みたいな軽い気持ちで、「ガイジ」ということばを言う時がありました。ある日の夜、父は、僕が生まれたとき一番はじめに見たところが左手だったことを涙ながらに話してくれました。それから、僕の中にあつた障がい者に対する気持ちが変わりました。障がい者をみかけると「この人も、これまでつらい思いをたくさんしてきたんだなあ」と思いをはせることができるようになりました。父が流した涙を無駄にしないために障がいのある人も幸せに暮らしていけるために何かできることはないかと考えるけど、何も実行できないのが、今の自分です。 (ある中学生の話)

心の「バリアフリー」をめざして

障がいのある人もない人も、自分の住みたいところで自分の能力を発揮し、自分らしい生き方で暮らすために必要なものがバリアフリーです。バリアフリーとは、行動や人間関係を阻む壁をなくしていくことです。

近年、公共の建物にエレベーターが設置されたり、町には点字ブロックや音声信号が整備されたりするなど、障がい者の移動を阻む壁はひとところと比べるとずいぶん低くなりました。また、「どこでも、だれでも、自由に、使いやすく」というユニバーサルデザインの考え方による施設や商品等

も増えてきています。しかしながら、今なお、障がい者に対する心ない発言や、社会福祉施設等の建設で地域住民との摩擦がおこるなど、心のバリアフリーは十分とは言えません。

障がいを個性として

社会は、身長が高い人や低い人、怒りっぽい人、穏やかな人など、多様な個性をもつ人々で構成されています。障がいもそのような個性の一つであると捉えることによって、障がいのある人もない人も、その人らしく生きがいをもって生活できる社会が実現できるのではないのでしょうか。

－ 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律 －

すべての国民が、障がいの有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら、共生する社会の実現に向け、障がいを理由とする差別の解消を推進することを目的として、2016(平成28)年4月1日に「障害者差別解消法」が施行されました。

この法律は、障がいのある人もない人も、互いに、その人らしさを認め合いながら、共に生きる社会をつくることをめざしています。この法律では「不当な差別的取扱い」を禁止し、「合理的配慮の提供」を求めています。

〈不当な差別的取扱いの具体例〉

- 受付の対応を拒否する。
- 本人を無視して、介助者や支援者、付き添いの人だけに話しかける。
- 学校の受験や、入学を拒否する。
- 障がい者向け物件はないと言って対応しない。
- 保護者や介助者が一緒にいないとお店には入れない。

参考：障害者差別解消法リーフレット(内閣府)

〈合理的配慮の具体例〉

- 障がいのある人の障がいの特性に応じて座席を決める。
- 障がいのある人から「自分で書き込むのが難しいので代わりに書いてほしい」と伝えられたとき、代わりに書くことに問題がない書類の場合は、その人の意志を十分に確認しながら代わりに書く。
- 意志を伝えるために絵や写真のカードやタブレット端末を使う。
- 段差がある場合に、スロープなどを使って補助する。